



ハーレム シニア

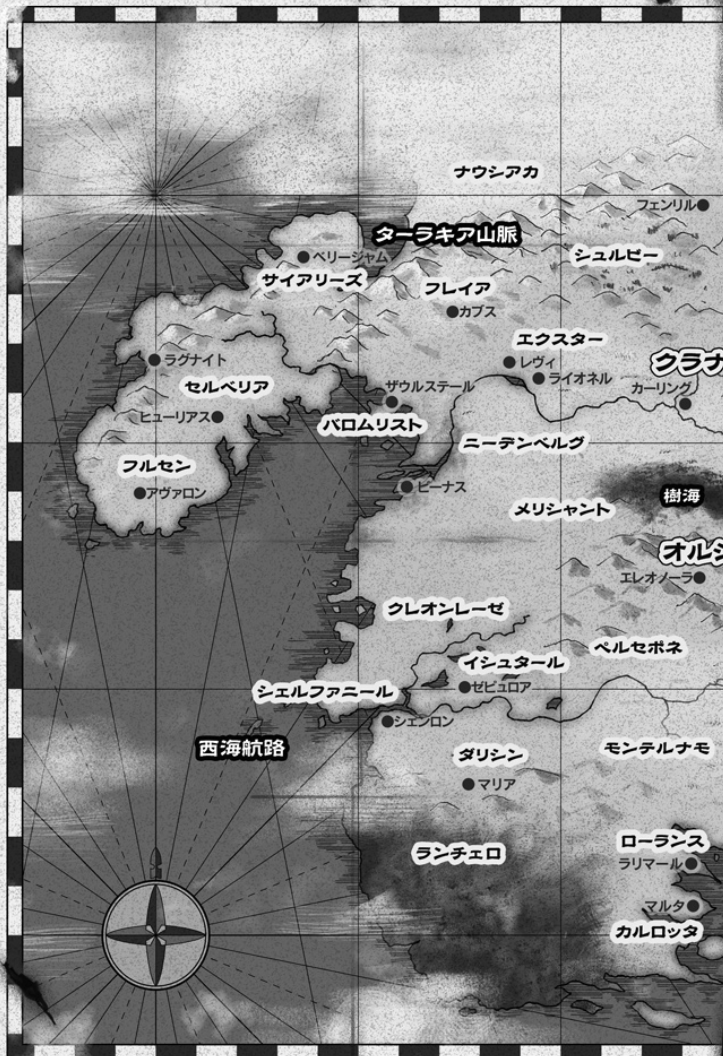
Harem Thief

小説 竹内けん 挿絵 SAIPACo.

立ち読み版

ハーレムシリーズの世界





ナウシアカ

フェンリル

ターラキア山脈

シュルビー

サイアリーズ

フレリア

●カブス

エクスター

●ラグナイト

セルベリア

ザウルステール

●レヴィ

●ライオネル

クラナ

カーリング

ヒューリアス

バロムリスト

ニーテンベルグ

フルセン

●アヴァロン

●ビーナス

メリシャント

樹海

オルシア

エレオノーラ

クレオンレーゼ

ベルセボネ

イシュタール

●ゼビュロア

シエルファニール

●シェンロン

西海航路

ダリシン

モンテルナモ

●マリア

ランチェロ

ローランス

ラリマール

●マルタ

カルロッタ



ニルヴァーナ

ラルフィント王国雲山朝の王女。
清楚で柔和な笑顔で国民から絶
大な支持を得ている。



登場人物紹介

Characters

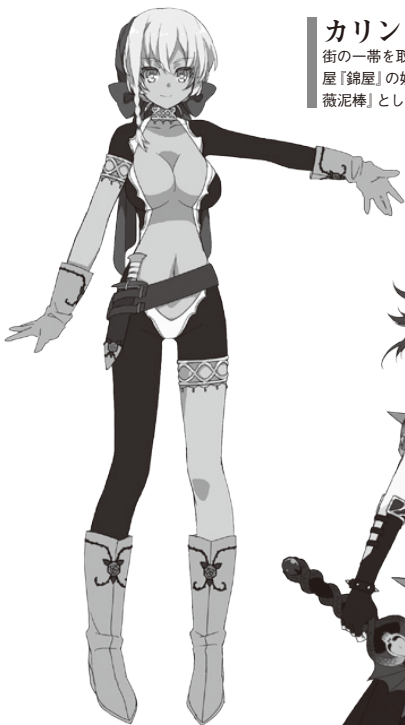


ロン

しがない盗賊の少年。女性に気付かれな
いように下着を抜き取るスゴ技を持つ。

カリン

街の一角を取り仕切る口入れ屋「錦屋」の娘。裏で怪盗「薔薇泥棒」として暗躍している。



ディアボロ

黒を貴重としたセクシーなコスチュームを着ている女剣士。ニルヴァーナの命を狙う。



第一章	スリの技術の活かし方
第二章	誘拐されたお姫様
第三章	下町の少年
第四章	金銀財宝に勝るお宝
第五章	怒る魔騎士
第六章	日常と非日常

「それじゃ、今度こそ」

「ええ、いいわ。入れて」

ニルヴァーナの許可をもらったロンは、いきり立つ逸物を右手に握ると、ヌレヌレの膣穴に添えた。

「入れます」

ズボッ！

先ほどとは明らかに違う。膣穴が柔らかくなっている感じがした。亀頭部が呑み込まれる。

「はぐっ」

ニルヴァーナは顎を上げて、奥歯を噛み締めた。

ぎゅっと締まる。

しかし、ここで止まれるものではない。ロンは体重をかけて一気に押し込む。

ズッ！ズズズズズ……。

狭い隧道が一気に広げられていく。同時に仮性交茎であった逸物の包皮がズル剥けにされてしまったようだ。

(あ、ヤバ、すげえ、滅茶苦茶気持ちいい)

念願だった女性の胎内。それも絶世の美女。それも国を代表するお姫様で筆下ろしができたのだ。

剥きだしの亀頭部に、ザラザラの贅肉が絡みつき、ロンはたちまち射精しそうになった。しかし、挿入と同時に射精というのは、男として格好悪すぎる。

ロンは襲いくる快感に、全身全霊で対抗した。

そして、なんとか急激な射精欲求の波を乗りきることに成功する。

「はあ、はあ、はあ……」

男に深々と貫かれた姫様は、顔といわず白かった全身を赤く染めて耐えている。

その壮絶な痛がり方から、ロンは悟った。

「あ、あの……やっぱり、初めてなんですか？」

その質問にニルヴァーナは怒ったように答えた。

「そうよ。決まっているでしょ。誰も相手をしてくれないから、オナニーに嵌っていたんだし」

神聖にして不可侵なお姫様は、やっばちのように答える。

「まったく、みんなしてわたくしが生身の女だということを忘れているんですわ。わたくしだって身体が疼いて、無性にセックスを楽しみたくなる日があるというのに……。誰も彼も、わたしを敬うばかりで、女として見てくれなかった」

聖女様には、聖女様の苦勞がある、ということだろう。

「あん、予想以上にきついけど気持ちいい。このオマ○コの中がみっちり詰まった充実感たまらないわ」

いろいろと早口でまくし立てているのは、痛みを誤魔化そうとしての方ばかりかもしれない。黙って見ていると、やがてニルヴァーナは叫んだ。

「何ぼーっとしていているの。動きなさい。あんたのそのでつかくて、堅くて、ゴツゴツした凶悪なおちんちんで、わたくしの中を滅茶苦茶にしなさい。わたくしは聖女なんかじゃない。ただの牝に過ぎないのだから！」

「は、はい」

ニルヴァーナの剣幕に煽られたロンは、慌てて腰を使い始める。

(うお、ザラザラの襲が逃がさないと叫びたげに絡みついてきて、気持ちよすぎる)

中に入っているだけでも気持ちよかったが、動かすと肉棒に襲いくる快感は何倍にも増幅される。

その気持ちよさを楽しみたい、という気持ちと、まだまだ射精したくないという願望に捕らわれたロンは、ひたすら、夢中になって腰を前後させた。

ズッコ、ズッコ、ズッコ。

一突きごとに、白い乳房が揺れている。

「ああ、凄い。わたくし、どこの馬の骨ともわからない。街のコソ泥にやられちゃうだなんて。はあ、たまらないわ」

優等生は不良に憧れる、という心理がある、という。

それに似た心理状態なのだろうか、比類なき出自ゆえに、あえて氏素性のわからない卑

しい男にやられたい。そんな願望があつたのだろうか、ニルヴァーナはとっても気持ちよさそうだ。

ロンもまたこの世のものとは思えない体験の中で、激しく腰を振るつた。そして、限界を迎える。

「姫様、もう、出る」

「いいわ。出しなさい。わたくしの中に、出すのよ」
「くっ」

限界を超えたロンは、逸物を思いつき押し込んだ状態で射精した。

ドビュ——!!!

「ああああああああ!!!」

女には膣内射精される本能的な喜びというのがあるらしい。

破瓜の痛みに苦悶していたニルヴァーナは、恍惚の表情を浮かべ、半開きになった口唇から涎を噴いた。

どっぶん！ どっぶん！ どっぶん！

心ゆくまで射精したロンは、逸物が完全に小さくなってから引き抜いた。

膣穴は一旦閉じる。しかし、すぐに股を開くと、どばつと白濁液を逆噴射させた。

そこには赤い血が確かに混じっている。

「あはっ、わたくし、本当にセックスしたのね」

自らの陰部から溢れ出す液体をニルヴァーナは、指で掬って興味深そうに確かめる。

「まさかこんなところで、こんな形で、名もなき庶民どころか泥棒相手に、処女を捨てることになるとは思わなかったわ」

「ご、ごめんなさい」

確かにニルヴァーナ王女の初めての相手として、自分は力不足だ。

「別にいいのよ。だからこそいいの。わたくしすっごい興奮している。身分違いの恋って燃えるものね」

これを恋と言っているかどうか、甚だ疑問を感じないでもない。

「わたくしはあなたにあの恥ずかしいオナニーを見られるまで、自分の性欲をひた隠しにしていた。でも、もうあなたにはわたくしがとつてもエッチな女だと、ばれてしまっているんだから、隠す必要はないわ」

指に付着した白い液体をまるで砂糖水でも舐めるように、ニルヴァーナはペロペロと卑猥に舌で舐め回す。

「うふふ、これからここで潜伏している間、お互いすることはないんだし、セックス三味の爛れた日々を楽しみましょう♪」

「えっ」

「わたくしのことを滅茶苦茶にしているわ。これは命令よ。わたくしを、あなたのちんちんの奴隷にしてごらんなさい」



寝台から降りたニルヴァーナは、精液と愛液で汚れて萎しぼんでいる逸物を、躊躇うことな
く口に含んだ。

「っ！」

目の前に両足を見たディアボロは、驚いた様子で顔を上げる。

「……」

しばし沈黙が流れる。気まずい雰囲気の中でロンは、恐る恐る質問してみる。

「……どうしたの？」

「……」

「もしかしてお尻が支つかえましたか？」

ディアボロはバツが悪そうに顔を背ける。

ここまで必死に笑いを堪えていたロンは耐えられず、嘔いてしまった。

「ふっ、はっあはっはっはっ♪」

どうやら見たまんま、この恐ろしい女騎士は、壁の穴に上体を入れたところで、お尻が支えてしまったのだ。

別に彼女のお尻が大きいというわけではない。どちらかといえば引き締まった小尻タイプなのだが、腰当てが邪魔している。

だからといって、戻ろうにも今度は肩当てが支えてしまっているようだ。

つまり、ディアボロは壁に腹部まで入ったところで、進むことも引くこともできなくなっただのだ。

「わ、笑うな！ お前は殺す！ 絶対に殺す！」

必死に脅してくるが、顔を真つ赤にして、涙目になっている状態では迫力がないことこの上ない。

その手は必死に愛剣を探るが、どこにもなかった。

抜け目ない、というより手癖の悪いロンは、いち早く転がっていた髑髏の剣を拾っていたのだ。

それを弄びながら、眼下のディアボロを鼻で笑う。

「そうは言っても、この状態じゃ無理でしょ。それどころか、今なら俺が返り討ちにすることもできる」

普通に立ち会えば、エリート騎士と街のコソ泥では、そもそも勝負になるはずがない。しかし、この状態では生殺与奪の権利は、ロンのものだ。

冷や汗を流して見上げたディアボロは、悔しそうに口を開く。

「くっ……殺せ！　ひと思いに殺せ！」

人の悪い笑みを浮かべたロンは首を横に振るう。

「騎士のみなさんつて、生き恥を晒すくらいなら、名誉ある死を選ぶつて話はよく聞くけど、その姿で死体を晒すのはかなりみつともないと思うよ」

「くっ」

ディアボロは鼻白むが、もちろん、ロンにそのつもりはない。確かに今のディアボロを討ち取るとはたやすい。

しかし、相手はれっきとした騎士だ。それも王宮直属という上級騎士である。

こんなのを殺したらえらいことになってしまう。

国家というのは、ある意味でヤクザに似た性質を持っている。だから、ヤクザの間では、御上のことを自分たちより組織の上位組にたとえて、○○組などと呼ぶ。

国民を殺されて捜査するのは仕事だからだが、公務員を殺されると、身内を殺された、ということまで追ってくるのだ。

もし、ここでディアボロを殺してもしたら、国家が総力を上げて犯人を突き止めて、ロンはもとより、錦屋を取り潰すだろう。

だから、まかり間違っても殺すことはできないのだが、このまま何もせずに助けてやるのは、生命をつけ狙われた身としては、少し癪しゃくに障さわる。

ロンはその場に屈み込んで、ディアボロに語りかけた。

「俺には難しいことはわからないけど、どうやら姫様は王宮に帰る段取りをつけたみたいだよ。パバアは任務に失敗して、俺への復讐も失敗した。その拳句にこんな姿で誰かの救出を待つって、騎士としての面子丸潰れでしょ」

「……」

「俺が助けてあげても、いいよ」

両肘で上体を支えながら上を向いたディアボロは胡散臭そうな表情で応じる。

「何か交換条件がありそうだな、コソ泥」

「えへへ、ご名答」

悪戯小僧よろしくロンは、鼻の下を指でこする。

「でも、そんな難しいことじゃないよ」

ディアボロの顔先で、蹲踞の姿勢で屈み込んでいたロンはおもむろにズボンから逸物を取り出す。

「な、何を、き、汚いものを見せるな！」

激怒するディアボロに向かって、多少傷ついた表情を浮かべながらロンは軽く逸物を扱いてみせる。

小さかった逸物が、みるみるうちに大きくなっていった。

「そう邪険に扱わないでよ。ババアは今までのいろんなチンポ見ているんでしょ」

「何を言っている？」

怪訝けげんな顔をするディアボロに、ロンはぬけぬけと提案する。

「で、お願いは……俺のチンポもしゃぶって♪」

「ふ、ふざけるなっ!!」

激怒するディアボロの頬を大きくなった逸物で往復して叩く。

誇り高い女にとって、これほど屈辱的な体験はそうないだろう。

逆に言えば、男にとって嗜虐心を大いに刺激される。

「嘔み切ってやる！」

「おっと」

ほんとに嘔みつかれそうになったロンは慌てて逸物を引くと、精いっぱい伸び上がるデ
イアポロの額に乗せてやる。

「実は一目惚れだったんだよね」

「な、何を言っている？」

驚き目を剥くデイアポロに、ロンは夢見るように応じる。

「やっぱさ。淫乱お姉様って憧れるじゃん」

「はあ？」

ロンの言っていることが理解できん、とデイアポロは怪訝な表情を浮かべている。

「初めて見たとき、うわ、こんな淫乱っぽいお姉様初めて見たって感動したんだよね。だ
から、ついつい下着を盗んじやつたんだ」

「そ、そうなのか？」

デイアポロはいささか戸惑った顔をしている。

「うん、だから、ババア。もといデイアポロお姉さんにしゃぶってもらいたいんだよね」
別に嘘は言っていない。ニルヴァーナやカリンとの性生活に不満があったか、と聞かれ
ればあるはずかない。

毎日、霞みも出なくなるまで楽しんでた。

しかし、見るからに清楚なニルヴァーナや、性に疎うとそうなカリンであれである。見るか

らにド淫乱のディアボロとエッチできたら、どれほど凄い体験をさせてもらえるのか、とつい妄想が逞しくなってしまう。

相手に噛み切られかねないスリルを楽しむように、ロンは逸物の先端を、ディアボロの紫の口紅の塗られた唇に添えると、撫で回した。

「……」

壁に嵌って動けない状態で、顔に先走りの液を塗りたくられながら、化粧の濃い女騎士は、脳裏で必死に打算を巡らせたようだ。

やがて紫のアイシャドーの塗られた目元の奥で、瞳を泳がせながら口を開く。

「し、仕方ないな。お前がそんなに言うなら、しゃ、しゃぶるぐらいしてやる。これでいいのか？」

両肘を床についたディアボロは、上体をのけぞらせて、紫色の口紅の引かれた唇を開いた。

白い歯並びと、赤い舌が覗く。

「わーい、ありがとう、ディアボロお姉さん。あ、でも、噛み切るのだけはなしだからね」調子のいい小僧は嬉々として、動けないお姉様の口内に逸物を押し込んだ。

「うぐっ」

逸物は喉奥まで入ってしまったようだ。ディアボロは目を白黒させるも、きゅつと唇を閉じてきた。

(うくん、女の人がおちんちん啜えている表情って卑猥でいいよなあ)

どんなに迫力のある美女でも、逸物を啜えているときは間延びしてしまい、いささか滑稽な顔立ちになってしまう。

自分の逸物を啜えているせいで、女はそんな間抜け面を晒しているのだ、と思うと、男としては胸が熱くなる。

気をよくしたロンは、ディアボロの頭を抱えて腰を前後させる。

「うぐ、うぐ」

いわゆるイラマチオだ。

ディアボロは苦しげに呻き、目元に涙を溜めて、紫色の口の端からダラダラと涎を溢れさせた。

あの死神と見紛う女騎士が、このような表情を晒してくれている、というだけで男としてはたまらない気持ちになるのだが……。

(うくん、思ったほど気持ちよくないな)

見るからにド淫乱のお姉様に、しゃぶってもらえているのだ。それはもう想像を絶する快感が襲ってくるのかと期待したのだが、期待したほどではなかった。

「ディアボロお姉さん、不満なのはわかるけど、もっと舌とか絡ませてよ」

「うぐ……」

ロンに促されたディアボロは、必死に舌を逸物に絡ませようとしてくれたようだが、た

いして変わらない。

「ぶはっ……はぁ、はぁ、はぁ……」

大量の唾液とともに逸物を吐き出したディアボロは、苦しげに呼吸しながら訴える。

「これ以上は無理だ」

「うーん、体勢的に無理があつたか。……残念」

いかに超絶テクニクを持つ淫乱お姉様でも、四つん這いで、腰の部分を壁に固定された状態では、どうしようもないのだろう。

ロンも納得した。

「ならばここまでということでもいいな」

「いや、仰向けになつてよ。前後は無理でも、横に回することはできるでしょ？」

「ああ、たぶん……」

ディアボロは素直に右回りに半回転した。

仰向けになつたディアボロの胴を、壁を背にしたロンは、跨いだ。そして、屈み込む。

「な、何を……あん♪」

ロンは薄い黒布の胸当ての上から、ディアボロの双乳を鷲掴みにした。

（うわ、大きい上にすげえ弾力。なんか油断していると弾き飛ばされそう）

なんとも揉みごたえたつぷりの乳房である。そして、これからやろうとしていることに思いをはせたロンは、生唾を飲みながら提案した。

「いいおっぱいだよね。これで俺のおっぱいで挟ませてもらうよ」

「は、話が違う！」

「だって、口じゃ満足できなかったんだもん。このまま惨めな姿で、部下が助けに来てくれるのを待つのと、俺にパイズリをして、名誉ある撤退をするの。どっちを選ぶ？」

不本意な二者択一を迫られたディアポロは、すでにフェラチオをするのを選んでしまったのだ。さらなる妥協を選択するしかない。それに射精しないことには男が収まらない、ということとは淫乱女なら当然心得ていることだろう。

ディアポロはしぶしぶながら、応じた。

「し、仕方ないな。そんなにその貧相なものをあたいの胸の間に入れたい、と言うなら入れるといい」

「賢明だね」

舌舐めずりをしたロンは、嬉々として胸当ての狭間から剥き出しになっていた白い胸の谷間に、唾液に濡れていきり立つ逸物を押し込んだ。

しかし、いかに大きな乳房でも、仰向けになっていると左右に流れてしまつて、谷間が開いてしまつている。これでは物足りない。

「左右から手で押さえてよ」

「この……コソ泥が、調子づきやがつて……」

ロンの指示に従つて、ディアポロはイヤイヤながら肘を左右に張り、自らの双乳を左右

から押す。

「これでいいのか？」

「うほ、極楽♪ 俺さ、お姉さんと初めて会ったときから思っていたんだ。いいおっぱいしているなあ。おっぱいで挟みたいなあって」

ちなみにロンは、街でちよつと綺麗なお姉さんを見つけると、エッチさせて欲しいなあ、と考えてしまう、とつても惚れっぼい少年であった。

「貴様のようなコソ泥に惚れられても嬉しくもなんともないわ」

自慢の乳房を陵辱されて、ディアボロは悔しそうに吐き捨てる。

ロンのほうは腰を前後に振るい、バインバインの乳房に包まれた逸物を元氣よく踊らす。
「そんなこと言わずにさ。一緒に楽しもうよ。あ、そうだ。先端を舐めてよ。そのほうが俺早くイクよ♪」

「この糞ガキ、調子に乗りすぎだ！」

さすがに堪忍袋の緒が切れたとばかりに怒るディアボロの乳房を陵辱しながら、ロンは甘えた声を出す。

「ねえ、お願い。ディアボロお姉さんのお口で舐めてもらえないと満足できないの」

「悪ガキが……」

殺意に似た眼光を向けたディアボロだが、結局は素直に乳房の間から飛び出す亀頭部に向かって、舌を伸ばした。

ペロリ……ペロリ……ペロリ……。

毒を食らわば皿までという心境なのだろう。ディアボロは素直に舌を伸ばして、亀頭部の鈴割れを舐めてくれる。

「あはっ、最高〜♪」

王宮のエリート騎士と、市井のコソ泥。

ロンから見ると、充分に高嶺の花だ。その極上の胸に挟まれながら、先端を舐められる歡びに震えた。

しかし、自分だけが気持ちいいのも、なんだか申し訳ない気分になったロンは、両手を伸ばすと、ディアボロの黒い胸当てを左右に開き、剥き出しになったピンクの小さな乳首を抓んだ。

「あ、バカ、何をするっ!!」

「あはっ、コリッコリだ。お姉さんも楽しんで♪」

女は乳首だけでも充分にイクことができる。ニルヴァーナやカリンの乳首で磨いたテクニクを使い、ロンは素早く乳頭を扱き立てた。

「や、やめよ、ひい……」

望まぬ快感に晒されたディアボロは、顔を屈辱に赤くしながらも、必死に乳房を左右から寄せ亀頭部を舐めてくる。

「だ、ダメだ、そんなことされたら、胸が、胸が焼ける。あ、ダメ引っ張ったら、引っ張



「つちやだめえええ、取れちゃううううう!!!」

「さすがは淫乱お姉様、胸の感度も最高ですね」

乳房を弄り回されたディアボロが強制的に絶頂するさまを見下ろしながら、ロンもまた限界に達した。

「あ、俺ももう出る♪」

歡喜の雄叫びを上げたロンは、腰をぐいっと押し込んだ。

ディアボロの鼻先で、尿道口は大きく開き、白い液体が噴き出す。

ドビュ——ッ!!! ドビュッ! ドビュッ! ドビュッ!

「きゃっ」

意外と可愛らしい悲鳴を上げたディアボロは、髑髏の意匠で飾り立てた見るからに恐ろしげな美貌を、みるみるうちに白濁に染められていく。

赤い額当ても、濃いアイシャドーと目張りの入った目元も、紫の唇も、髑髏のネックレスも、みんなロンの精液塗れである。

男としてロンは、大いに征服欲を満たされた。

「はあり、満足。じゃ、腰の鎧外してあげるね。そうすれば、出られると思うよ」

「ああ、頼む……」

ロンは素直に、隣の部屋に回った。

そこには当然、壁から腰鎧とロングブーツに包まれた女の下半身が、仰向けになって出

ている。

(なんかシユールだな)

と思いつながら、ロンは素直にディアボロの腰鎧を外してやろうと手をかけた。

そこでふと気づく。黒いパンツの股布部分が濡れて変色し、さらに吸収しきれなかった分が、内腿を濡らしている。

(うわ、さすがは淫乱お姉様。ノリ気じゃなくても、チンポしゃぶって興奮していたんだ)そこでロンは右手を伸ばすと、黒いパンツに包まれた恥丘に人差し指を下ろした。

「っ！ ドサクサに紛れて、どこを触っているっ!？」

驚いたディアボロは必死に膝を閉じる。

「いや、お姉さんのパンツ、凄いヌレヌレだから、このまま解放するのは、ちよつと可哀想かと」

「よ、余計なお世話だっ!」

ディアボロは怒鳴るが、ロンから見えるのは、無防備な下半身だけである。これでは迫力がないことこの上ない。

「今なら、パンツを盗むんじゃないやなくて、堂々と脱がすことも可能ですよね」

「や、やめろ。約束が違うぞ!？」

貞操の危機を感じたディアボロは、両足をバタつかせて必死に逃れようと奮闘するが、そんなのに当たるほどロンはノロマではない。

一陣の風が吹き抜けると、太腿が冷たい。何かと目を向けると、左右の太腿の上は、大きな染みができていた。

お尻を濡らした女たちは、寝台に乗る。

「姫様だけロンのザーメン舐めてずるい」

「あたしにもください」

カリンのディアボロは、それぞれニルヴァーナの腰を跨ぎ、自らの股間を擦りつけながら、ニルヴァーナの乳房を弄ぶ。

「あ、ちよつと、二人がかりで、なんて……はあん♪」

ニルヴァーナはたまらず嬌声を上げて悶える。

寝台に三人の美女美少女が寝そべり、絡みあっているのだ。そんな光景を前にしては、いかな聖人君子な男でも心乱されるだろう。まして、ロンは聖人君子とは程遠い少年だ。

「ああ、ロン早く来て、そうしないと、わたくし、このまま二人にイカされてしまうわ」

「あ、はい……」

ニルヴァーナの誘惑の声に、ロンは急いで立ち上がった。

逸物はすでに隆々とそそり立っている。

「それじゃ、いきま〜すっ!」

ロンは寝台に向かって盛大にダイブした。空中で素早く素っ裸になった少年は、三人の女たちを同時に抱き締める。

「キヤツ♪」

女たちのわざとらしい悲鳴を聞きながら、ロンは嘯く。

「もうどうなっても知りませんよ。三人とも足腰をガタガタにして、明日は一人でトイレにだって行けないようにしてあげます」

「あはっ、ちよつと楽しみかも♪」

嬌声を上げるだけで、全然怖がっていない美女と美少女三人を並べてうつ伏せにしたロンは、尻を高く掲げさせた。

当然、ロンの視界には、三つの女尻が並ぶ。

左からカリン、ニルヴァーナ、ディアボロという順番だ。

「こうやって三人のお尻を並べて眺めると圧巻だね」

尻の大きさで言えば、ニルヴァーナが一番大きい。白くふわふわのお尻はどこかシュークariumを思わせる。

ディアボロのお尻は、きゅつと引き締まっている。白くツルツルであり、剥きたての茹で卵のようだ。

カリンのお尻は、引き締まっている上に若干日焼けしている。野性味溢れる果実のようで、かぶりつくとき甘い果汁が溢れてきそうだ。

「三人とも、オマ○コからお尻の穴まで丸見えだ」

人の顔に、目鼻口と同じパーツがあっても一人一人個性があるように、女性の陰部も同

じパーツでありながらも、一人一人違う。

肛門の色や形にしても、ニルヴァーナは濃い肌色。ディアボロは赤く、カリンは紫色だった。

陰毛の量は、ニルヴァーナが一番濃く、カリンは薄い。ディアボロは綺麗にカットして整えられている。

陰毛の色は、ニルヴァーナは緑色。カリンは水色。ディアボロは黒だ。

「ちょ、ちよつと、もしかして、このまま三人を並べて、じつくりと違いを堪能しようとか、しているわけ？」

「当然、そうなる」

ロンの答えに、カリンは顔を蒼くする。

「やっぱ、あたしやめるわ。こんな変態的な遊びについていけない」

逃げようとするカリンの尻をロンは押さえる。

「三人とも俺が盗んだ宝物だからね。俺が徹底的に愛でるんだ」

「今さら逃げるのはダメよ。三人で仲良く痴夢に耽りましょう」

「ダーリンの女なら、これくらいの遊びに付き合っただけよ」

ロンの意を汲んで、ディアボロは素早く移動。ニルヴァーナと左右からカリンを挟み込む形になる。

「ああ、もうこの変態女ども、こんなのが楽しいのよ」

「でも、カリンのオマ○コだって、トロットロだよ」

挿しながらか、ロンは右手を伸ばしカリンの肉裂に触れた。

「あん♪ そ、それは……」

肉裂から溢れ出た熱い液体が、内腿を濡らしていることは本人が一番自覚しているのだろ。

「ほら」

「ああ、ああ」

トロトロトロトロ——。

時として恥辱は、女を高める媚薬となる。

中に溜まっていた女蜜が、溢れだし、シートにまで滴った。

「さらに、お姫様と姐さんのオマ○コも見せてもらおうよ」

さらにロンは指を伸ばすと、三つの陰唇を開いていった。

ニルヴァーナとディアボロも、カリンに負け劣らずに濡れていた。

「あん、恥ずかしい。ただ見られるだけじゃなくて、他の女性と見比べられるなんて、恥ずかしくて死んでしまいたいそう……でも気持ちいい♪」

「ダーリン、あたしのオマ○コも好きだけ見ていいわよ」

三人とも蜜壺がヒクヒクして大量の液体を垂れ流している。

ちなみに一番愛液の量が多いのは、ニルヴァーナのようだ。

色合いは、ニルヴァーナは白っぽいピンク色。カリンは明るいサーモンピンク。ディアボロは淡いピンクだ。

淫核はニルヴァーナが一番大きく、包皮から完全に剥き出てしまっている。ロンと初めてやったときは、仮性包茎だったのだが、ロンがクンニするときに、いつも剥いていたせいで、剥け癖がついてしまったのだ。

カリンの淫核はまだ仮性包茎である。性的な興奮を表すように、小さく尖った赤黒い頭を少しでも覗かせていた。

ディアボロの淫核も勃起しているようだが、包皮から頭も覗かせていない。完全な包茎だった。

(ディアボロさん、一番年上なのに、一番綺麗な色だ。型崩れも全然してないし、ほんとまったく使ってなかったんだろうな)

少しでも衰れを感じたロンは、これからたっぷり可愛がってあげよう、などと不遜なことを考えてしまった。

「それじゃ、味見させていただきます」
美女美少女たちの陰唇を、たっぷりと目で楽しませてもらったロンは、次いで味比べをするために、顔を落とした。

ピチャリ、ピチャリ、ピチャリ。

ロンは、三つの蜜壺を交互に舐めた。

いずれもしよっぱくて酸っぱい独特の味だが、三人とも微妙に味は違った。

ディアボロの愛液は薄く、ニルヴァーナは平均的、カリンは濃かった。

「あん、あん、あん」

ロンは三つの蜜壺を交互に舐め回しただけでなく、空いている両手を使って、女たちの陰唇を愛撫してやった。

「ひいあん、ひいあん、ひいあん」

「じよ、上手、舌で舐められても、指で弄られても気持ちいい。魔法みたい。ロンの指を知ったら、もう離れられない」

「こ、こいつ、指先だけは昔から器用だから、あん」

ディアボロは我を忘れて喘ぎ、ニルヴァーナは陶醉し、カリンは悪態をついているが、その喘ぎ声は、いずれも大きくなっていく。

近くで同じ姿勢の女たちがいるのだ。女としての見栄とプライドが、刺激されるのだから。

「お宝を愛でるのに骨を惜しむなんてしてられないでしょ」

三人の美女の悶えっぷりにロンが気をよくしているところに、不意にニルヴァーナがさらに尻を高く掲げた。

「ああもうダメ、我慢できない。お願い入れて」

恥も外聞もなく尻を高く翳したニルヴァーナは、股の間から顔を見せ、両手を入れると

自らの陰唇を広く開いた。

「あたしも、あたしももうダメ。ダーリン、お願い。ぶち込んで♪」

ディアボロも負けず劣らず高く尻を翳すと、股の間から顔を出し、両手で陰唇を開いてみせた。

「くうく、あんたたちはいい年して、社会的な地位もあるのに、恥じらいはないのか！」
怒るカリンに、ニルヴァーナは澄まして応じる。

「ならカリンちゃんはいらないのね」

「ロン早くちようだ〜い♪」

ディアボロに至っては、カリンなど眼中にないようだ。

「あ、あたしだって欲しいわよ」

結局、カリンも淫乱女たちに負けてなるか、と大きく尻を上げて、股の間から顔を出す。
(まったく、三人ともなんて姿勢だ)

トロットロの陰唇と、欲情の紅潮した顔を並び見て、ロンは鼻血が出そうになる。

「それじゃ、入れますね」

ベッドの上に立ち上がったロンは、目の前の三つの尻を抱えると、いきり立つ逸物を、三つの蜜壺に交互に添えた。

「さて、どれから入れようかな？」

舌舐めずりをするロンに、女たちが我先にと、尻を高く翳してアピールする。

「ああ、焦らさないで」

「わたくしにください」

「あたしにちょうだい」

恥も外聞もなく懇願してくる女たちを前に、ロンはまずはニルヴァーナの膣穴に亀頭部を軽く押し入れる。

「あん」

ニルヴァーナは甘い歓声を上げる。しかし、すぐに抜いて、カリンを素通りしてディアボロの膣穴に同じく、亀頭だけ入れる。

「ふん」

ディアボロもまた、お尻を震わせながら甘い鼻息を漏らす。しかし、ここもすぐに抜いて、今度こそカリンの膣穴に亀頭を押し入る。

「はう」

カリンは両手で、シーツを握りしめながら、ハアハアと犬のように喘ぐ。そして、再びニルヴァーナの膣穴に戻る。

トロットロの熱い粘液が、横に糸を引き、三つの蜜壺を繋ぐ。

「ああ、ダメ、そんな入り口だけじゃ、我慢できない。欲求不満で死んじゃう。お願い、奥まで、ロンの大きなおちんちん、奥までずっぽり入れて」

ニルヴァーナがついに泣きだしたので、ロンは要望に応じてやることにした。

ズボリッ!

「あん、大きい。ああ、これがいいの〜♪」

ニルヴァーナは歓喜の声を張り上げると、すぐに引き抜いてディアボロの腔内に移動。さらにカリンと移動して、三つの肉壺から溢れる、それぞれの液体を混じりあわせる。

「くう……どのオマ○コも気持ちいい。姫様のオマ○コはフワフラでトロトロ。お嬢のオマ○コはコリコリでキュッキュツ。姐さんのオマ○コはビショビショでギューギュー」

「ど、どスケベ、変な論評しないでよ」

カリンは耳まで真っ赤にして怒鳴る。

「オマ○コに貴賤なし。お姫様だろうが、魔剣士だろうが、怪盗だろうが、いずれも最高のお宝だって言いたいんだよ」

三つの蜜壺を交互に味わえるのは、ロンにとっては至福である。

しかし、やはり、一突きごとに抜かれたのでは、女たちが一気に盛り上がることはできず、辛いらしい。

入れられてない状態でも、女たちは切なげに腰を振っている。俗に言う空腰からこしだ。見かねたロンは提案する。

「これじゃ、埒らちが明かないんで、一人ずつイかせますね」

「うん、それでいいわ」

女たちのほうも生殺し気分だったのだろう。一も二もなく賛成する。

「さて、誰から満足してもらおうかな」

ロンは目の前に並べられた、濡れてクネクネ動いている女尻を等分に眺める。

いずれも食べ頃、犯し頃。逸物をぶち込まれ激しく掘削されたら、ひいひい泣き喚く牝獣の正体を露呈させることは確実だ。

「よし、まずお嬢からいくか」

ズボリ。

三種類の愛液に濡れた逸物を、カリンの胎内にぶち込んだ。

「あん」

その決断に、ニルヴァーナが驚く。

「え、なんでカリンちゃんなの。カリンちゃんならいつでもできるし、わたくしがいなくなつてからも、やりまくっていたんでしょ」

カリンの胎内をザクザクと掘削しなから、ロンは首を横に振った。

「いや、お嬢、姫様がいなくなつたら、急によそよそしくなっちゃつて。あれから一度もやつてなかつたんです」

「え、なんで。お邪魔虫のわたくしがいなくなつて、カリンちゃんは四六時中、ロンとベタベタしているんだと思つて、わたくしすつごい嫉妬していたのに……」

「俺もそれを知りたかつた」

ロンは、カリンの両腕を持つと、背後に引っ張り、上体を反らさせた。

おかげで否応なく、カリンの顔に女たちの視線が突き刺さる。

カリンは顔を背ける。

「こんな感じなんです。そこで二人にお願いなんですけど、カリンが素直になるように、おっぱい舐めしやぶつてくれませんか？」

「なるほど、ツンデレ娘を素直にするには、快感漬けが一番よね」

ニルヴァーナは素早く、カリンの左の乳房に取りついた。

「ダーリンの頼みなら、あたい、なんでもするわよ」

ディアボロは、カリンの右の乳房に取りついた。

同性たちの愛撫にカリンは逃れようとするが、ニルヴァーナが窘める。

「せっかく、女三人で一人の男をシェアするのよ。女同士でも快感を高めあい、普通の男女関係では味わえないより深い快感を楽しまないともったいないでしょ」

ディアボロも悪乗りしてからかう。

「若いのにこんなにおっぱい育っちゃって……オナニーやり過ぎだな」

「ちよ、ちよつと、そんなにやってないもん」

カリンは顔を真っ赤にして反論する、ということはオナニーをしている、ということだろ。

気が強くて女王様気質の幼馴染みが、自慰をしている、などと考えたこともなかった口は、新鮮な驚きに捕らわれる。

自然と腰使いに力が入った。

ズッコ、ズッコ、ズッコ。

後背位で、男の荒々しくも力強い掘削を受けながら、年上の女たちの柔らかくも壺を心得た愛撫に晒されたのだ。

「ら、らめ、そんなにされたら、あたし……」

たまらずカリンは泣き喚き、膣穴もキュッキュツと小気味よく痙攣しだした。
(くっ、これはいきっぱなしの状態に入ったな)

ザラザラの膣壁が、啜え込んでいる肉棒に向かって、早く射精してくれ、と訴えているかのようだ。

「カリンちゃん、わたくしがいなくなつて、なんでロンから離れたの？」

「そ、それは……だ、だつて……あたし一人で、ロンの相手をしていたら、本当に溺れそうで怖かったんだもん」

「うわ、可愛い♪」

歡喜の声を上げたニルヴァーナは、右手を伸ばし、男女の結合部をまさぐつた。

「ひいあ」

どうやら淫核を指で捕らえたようだ。カリンは口元から涎を溢れさせる。

「も、もうダメ、いく、いく、いく、イクウウウウウ!!!」

「うおおおおおお!!!」

カリンの絶頂に釣られてロンもまた、雄叫びを上げながら射精した。

ドビュユユユユユ!!!

「はあ、はああ、はあああああ!!!」

すでにイキつばなしの状態に入っていたカリンだが、膣内なか射精だされたことで、さらに上のステージへと駆け昇つたらしい。

ビシュ、ビシュビシュビシュ……。

「あらあら、派手ね。一人目から失禁させちゃうなんて。みんながおしっこを漏らしていたら、わたくしのベッド、おしっこ臭くなってしまうわね」

そう言えばニルヴァーナもまた、失禁しやすい体質だ。

「ふう」

カリンの胎内を、自分の精液でいっぱいにするかのように注ぎ込んだところで、ロンは仰向けに倒れた。

ベッドの上で、大の字になったロンの上にディアポロが乗ってきた。

「それじゃ、次はあたいがやってやろう」

ロンの腰の上に蹲踞の姿勢で跨ったディアポロは、半萎えの逸物を手に取ると扱き上げ、情け容赦なく再勃起させる。

「あ、ずるい」

「こういうのは早いもの勝ちなのさ」



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

竹内けん

Takenti Ken presents harem series official guide

ハーレムシリーズ

公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、
「歴史年表」「人物相関図」
等々あの超人気シリーズの
世界観を網羅した
完全ガイドが登場!!

特別描き下ろし
イラストも多数収録!



Now On Sale!!

A5判/定価990円(税込)



特設サイトはこちらからアクセス!!



<http://ktcom.jp/harem/>

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ?



ドキドキラブな
ハーレム系ライトノベル!

二次元
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう!
かなり過激なライトノベル!

二次元
ドリームノベルズ

サイズ:新書

※盗作・転載・無断複製は厳禁です。著作権者・発行元・編集者・デザイナーの許可なくしては、本誌の複製・転載・無断複製は厳禁です。

日常に密着したエロス、リアルな
舞台設定で送る官能小説レーベル!

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ!

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの
公式サイトにて!

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!



キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- ◎雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!**19日発売!**
- ◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアル**のバックナンバー**も買えるよ!
- ◎**ジャンル別**で作品も選べて超便利!
- ◎二次元編集部**の愉快的Blog**も更新中!

ヴァルキリー

<http://www.comic- Valkyrie.com/>

cranberry

<http://www.cran-berry.com/>

mille-feuille

<http://www.mille-feuille.jp/>

**モバイル二次元
ドリーム**

<http://www.2d-dream.jp/>

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!